NHK学園

NHK学園生涯学習50周年記念

岡井隆賞

NHK学園短歌講座創設・監修にご尽力くださった岡井隆先生。
先生が亡くなられて5年。生涯学習事業がスタートして
50周年の節目に、お名前を冠した賞を設けることにいたしました。
ゆかりの深い歌人の皆様を選者にお迎えし、
先生が選者をつとめられた
「短歌友の会」コースと同様の未発表新作
5首1組の形式での作品募集をいたします。
いまのあなたの作品をお待ちしています。



投稿者特典

オンライン教室プラットフォーム
コエテコカレッジ内で岡井先生講演
（音声テープ）を無料視聴

※視聴にはオンラインサービス
「コエテコカレッジ」への登録が必要です。

〒 POST
郵送投稿できます

ネット投稿できます

作品募集中
5作品1組
未発表新作
投稿締切
令和8年
1月23日（金）
必着

選者紹介

敬称略
五十音順



佐伯 裕子
「未来」
NHK学園短歌講座
「短歌友の会」選者



笹 公人
「未来」
NHK学園短歌講座
「短歌友の会」選者



穂村 弘
「かばん」



大森 静佳
「塔」

主催 NHK学園

協力 未来短歌会

発表 令和8年3月31日（火）
NHK学園HPおよび4月5日発行『短歌春秋』にて発表

〒186-8001 東京都国立市富士見台2-36-2　学校法人NHK学園 岡井隆賞事務局　電話：042-572-3151（代表）

投稿要領

郵便あるいはＮＨＫ学園ホームページからのＷｅｂ投稿ができます。
所定の用紙（コピー可）を点線で切り取り使用してください。
投稿用紙はＮＨＫ学園のホームページからもプリントアウトできます。
ひとり何組でも、どなたでも応募できます。本大会関係者は投稿できません。

投稿上のルール

- 投稿作品は、未発表・自作で、作者本人からの投稿に限ります。
- 既発表作品・二重投稿（同一及び類似作品を新聞・雑誌・テレビ・ラジオ・コンクール・結社誌・同人誌・ＷＥＢサイト・ブログ・ＳＮＳ等への投稿）は、固くお断りします。
- 同一作品、類似作品が先行して発表されていた場合、入選・入賞を辞退していただくことがあります。

投稿料

ＮＨＫ学園短歌通信講座受講者……二、〇〇〇円
一般の方……三、五〇〇円（短歌春秋代含む）
納入された投稿料はご返金いたしかねます。お振込の際はご注意ください。

郵便払込をご利用の際は　※払込手数料はご本人様負担となります。

- 郵便払込取扱票の通信欄に組数と投稿料をご記入の上、払込みください。
- 複数組ご投稿の場合は、合計金額を払込みの上、振替払込受付証明書を投稿用紙の振替払込受付証明書貼付欄に貼り付けて、ご応募ください。

（証明書がない場合は、払込みした日付を投稿用紙の振替払込受付証明書貼付欄にご記入ください）

口座番号：００１８０－２－３５７９４４
加入者名：ＮＨＫ学園　短歌大会事務局

投稿締切

郵便でのご投稿　令和８年１月23日（金）必着
ネットでのご投稿　令和８年１月23日（金）23時59分

投稿先

1 郵便でのご投稿

送っていただくもの

①投稿用紙（折っても可）
②投稿料（郵便払込の場合は振替払込受付証明書またはその写し）

2 インターネットでのご投稿

ＮＨＫ学園ホームページから投稿できます。クレジット一括払いの受付となります。

〒186-8001 東京都国立市富士見台2-36-2
岡井隆賞事務局　電話　042（572）3151（代表）

募集作品

未発表新作5首を一組とし、募集します。テーマは自由です。表題（タイトル）をつけてください。

賞

- **岡井隆賞**　1作品。賞状とトロフィー贈呈。
- **選者賞**　4作品。賞状をお贈りします。
- **特選**　8作品。賞状をお贈りします。
- **佳作**　12作品。

投稿された方には投稿の組数に関わらず『短歌春秋』を一冊お送りいたします。



岡井　隆（おかい　たかし）
昭和三年　愛知生まれ
令和二年　92歳で逝去

文化功労者。ＮＨＫ学園短歌講座創設及び監修者。１９８２年に、歌人近藤芳美先生とともに、ＮＨＫ学園短歌講座を創設。会派を越えた歌人の皆さんが講座運営に携わる礎をつくってくださいました。
また永年、ＮＨＫ学園短歌友の会選者・ＮＨＫ全国短歌大会選者として指導。
各地で開催した短歌大会、国内外への学習の旅、オープンスクール教室では、直接愛好家の皆さんに語りかけ、「歌を作り続ける歩み」を励ましてくださいました。

応募上のご注意　必ずお読みください

- 投稿後の作品訂正、さしかえはできません。
- 入選作品は、ＮＨＫ学園の刊行物・インターネット媒体等で使用させていただくことがあります。
- 選考に関するお問い合わせにはお答えできません。投稿された作品は返却いたしません。
- 大会事務局であるＮＨＫ学園では、個人情報保護の重要性を深く認識し、取得の際に示した利用目的の範囲内で利用します。お預かりした個人情報は、ＮＨＫ学園の通信講座や大会のご案内にのみ使用させていただくことがあります（当学園ホームページに、個人情報保護ポリシーを記載しております）。
- 作品投稿した時点で本注意事項に同意したものとします。

ご投稿には点線を切り
宛先として貼ると便利です

〒186-8001
東京都国立市富士見台2-36-2
ＮＨＫ学園　岡井隆賞事務局

NHK学園
生涯学習フェスティバル

岡井隆賞投稿用紙

投稿締切
令和8年1月23日(金)必着

名　前	フリガナ （男・女） （　　歳）
住　所	〒 都道府県
電話番号	—　　—
受講番号	
生年月日	大正・昭和・平成・令和　　年　　月　　日　※任意でご記入ください。

のりしろ

振替払込受付証明書貼付欄

投稿料は、同封または郵便局にある払込取扱票をご利用いただき、郵便局でお支払いください

- 窓口でお支払いの場合は「払込受付証明書（お客様用）」または「振替払込請求書兼受領証」のコピーを貼ってください。
- ATMでお支払いの場合は「払込受付証明書（お客様用）」が出ませんので、払込日をご記入ください。

払込日　　月　　日

「投稿用紙」に記載された個人情報は、今大会の運営に使用するほか、機関誌『短歌春秋』の作成と配布、NHK学園の短歌大会、通信講座のご案内に使用します。

投稿前に必ず左記2点をご確認のうえ2点とも☑印をつけてください。

- ☐ 未発表・自作に間違いない
- ☐ 二重投稿（同一作品を他へ投稿）していない

- 複数組を投稿する場合、コピーも可
- 楷書で濃くお書きください
- 作品の控えをお手元に残してください

受付番号（NHK学園記入）

フリガナ 掲載するお名前	

受付番号（NHK学園記入）

表　題（タイトル）	

1	
2	
3	
4	
5	

ありがとう岡井 隆先生

NHK学園機関誌『短歌春秋』二〇二〇年十月発行号より

岡井 隆　歌十五首（一）

母の内に暗くひろがる原野ありてそこ行くときのわれ鉛の兵
【斉唱】

肺尖にひとつ昼顔の花燃ゆと告げんとしつつたわむ言葉は
【朝狩】

朝狩りにいまたつらしも　拠点いくつふかい朝から狩りいだすべく
【朝狩】

海こえてかなしき婚をあせりたる権力のやわらかき部分見ゆ
【朝狩】

玄海の春の潮のはぐくみしいろくづを売る声はさすらふ
【鵞卵亭】

ホメロスを読まばや春の潮騒のとどろく窓ゆ光あつめて
【鵞卵亭】

生きがたき此の生のはてに桃植ゑて死も明かうせむそのはなざかり
【鵞卵亭】

歳月はさぶしき乳を頒てども復た春は来ぬ花をかかげて
【歳月の贈物】

定型の格子が騒ぎ止まぬ故むなしく意味をひき寄せにけり
【マニエリスムの旅】

扇風機片手提げして北へ来ぬ浪吉に読む弟子のかなしさ
【人生の視える場所】

蒼穹は蜜かたむけてゐたりけり時こそはわがしづけき伴侶
【人生の視える場所】

雨傘をはらりひろげて逢はむとす天はほのかに杉にほひたる
【禁忌と好色】

やさしさが傾いてくる黄昏は遠のむかしに滅びたんだよ
【宮殿】

ヘイ　龍　カム・ヒアといふ声がするまつ暗だぜつていふ声が添ふ
【宮殿】

冬螢飼ふ沼までは（俺たちだ）ほそいあぶない橋をわたって
【神の仕事場】

（抄出　黒木三千代・中川佐和子）

「いちばんよく見えるように」

「未来」編集発行人　大辻隆弘

岡井さんのことを思うと、歌会での岡井さんの表情を思い出す。

岡井さんは何より、歌会が好きだった人だった。あのこぼれるような笑顔で歌を語った。他人の歌を読み、味わい、それについて語ることが大好きな人だったと思う。

私は、一九九三年から十二年間、毎月、京都・大阪・名古屋で行われる岡井隆さん主宰の歌会に参加してきた。そこで常に感じたのは、岡井さんの読みの豊かさである。

彼は、比喩や韻律、助詞・助動詞に至るまで歌の細部にとことんまで拘り、そこから作者の意図を読み取る。ときには、作者自身も気づいていないであろう意識下の心の動きまで読み取ってしまう。

歌はね、その歌が一番よく見えるように読んであげる、それが一番大切なんだよ。

彼は歌会の席でいつもよくこう言った。「よく読んであげる」とは、妄想を逞しくして、作品の背後に自分勝手なストーリーを作り上げることではない。歌の表現の細部にとことんまで拘り、そこからその歌にとって一番よい読み方を模索する。そういう真摯な態度のことを言う。岡井さんは常に歌そのものの言葉から、一首の読みを探り、歌の世界を立体的にしていった。

例えば一九九八年四月に行われた京都の歌会で、このような歌が出た。

食べ残しの葱らに坊主が立つところ
跨ぐなどして母の家なり

岡井さんは、無記名のこの歌を見て「食べ残しの葱、という表現で自家栽培をしているということが分かる」と指摘した上で、なぜ「葱」に「ら」という親称がついているのだろう、と疑問を提出する。さらに第四句から結句の「母の家なり」にかすかな文脈のよじれがあることに言及し、そこに一人暮らしの母の家を訪れたときの、娘のかすかな失望と驚きを読み取ってゆく。

この歌の作者は河野裕子さんだったが、おそらく彼女自身も意識していなかったような文脈の触感を岡井さんは見い出し、それを言葉にしていった。若い私はそれを奇跡を見るような気持ちで見つめていた。

他人の歌を全否定することは簡単にできる。「この歌はダメ」という一言で歌評を終える。そんな傲慢なもの言いをする人は短歌界にいまだに存在する。が、そのような態度を取る限り、その人の読みは深くならないし、広がることもない。偏狭な自分の読みの枠内から脱出することは永久にない。

自分の価値観をまず括弧にくくり、まっさらな状態で歌そのものに真向かう。そして歌に書かれている文面のかすかな感触を見逃さず、そこから歌を読んでゆく。

岡井さんの歌の読み方に触れることによって「私も岡井さんのように歌が読めるようになりたい」と思った。

何よりも貴重な体験である。